

瀬田唐橋を石山方面から東へまっすぐに進みますと、建部大社が鎮座しています。主祭神に日本武尊を祀り、毎年8月17日には神霊を移した神輿を船に乗せて瀬田川を下る船幸祭が行われ、多くの人でにぎわいます。

もとの社名は建部神社で、明治32年(1899)建部大社と改称されました。平安時代後期から中世にかけて、各国の神社は一宮・二宮・三宮などの格式づけがされ、建部神社は近江国を守護する最高格の一宮が与えられました。古くから武將の崇敬があつく、源頼朝は伊豆へ流される途中に参籠していますし、室町幕府3代將軍足利義満も詣でています。

大津宮時代以降、壬申の乱など、当地はたびたび戦乱の舞台になりました。平安時代以降も京都への入り口として瀬田の地の重要性は一層高まり、南北朝の内乱期の観応元

年(1350)には、瀬田に進攻した南朝軍によって、勢多橋や付近の建物などとともに建部神社も焼き払われてしまいました。

永正7年(1510)の年記がある社伝『神縁年録』には、当社はもと神崎郡建部郷(東近江市建部付近)にあったのが、天武天皇4年(675)に湖を下って瀬田の地に着き、現在の社地から東へ約300㍎あまりの大野山頂に遷座したとあります。さらに天平勝宝7年(755)、建部公伊賀麿によって現在地に移されたと記されています。

建部公伊賀麿は、『続日本紀』天平神護2年(766)に、滋賀郡(大津市の琵琶湖・瀬田川西岸地域)の軍団の長官としてみえる実在の人物です。また、祭神の日本武尊は、父景行天皇の時代に国土統一のため東奔西走して軍事的に活躍した悲劇的英雄として神話に登場します。これら

建部大社



建部大社

族の勢力があった可能性が考えられます。

さて、建部神社の周辺には、奈良時代から平安時代前半(8世紀〜10世紀)にかけて古代近江国の行政・軍事の要である近江国府がありました。さまざまな役所の施設が整備され、今の津市京町の官庁街のような地域だったのです。建部神社の東の三大寺丘陵には、近江国府の中樞である近江国庁が置かれました。建部神社が瀬田へ移って最初に鎮座したと伝える場所はこの近くになります。

建部神社が現在地に移された正確な年代は不明ですが、瀬田川渡河地点を押さえ畿内と東国を結ぶ交通・軍事上の要衝で、近江国統治の中樞である国府の一角に位置していることなどから、当社が近江国全体の鎮守として瀬田の地に遷座されたことをうかがうことができます。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 平井美典)

このことから、ヤマト政権が置いた軍事集団である建部を率いた豪族建部君氏の氏神として当社が祀られたとみられており、瀬田に遷座されたころにはこのあたりに建部君氏一

交通の要衝 瀬田に遷座